



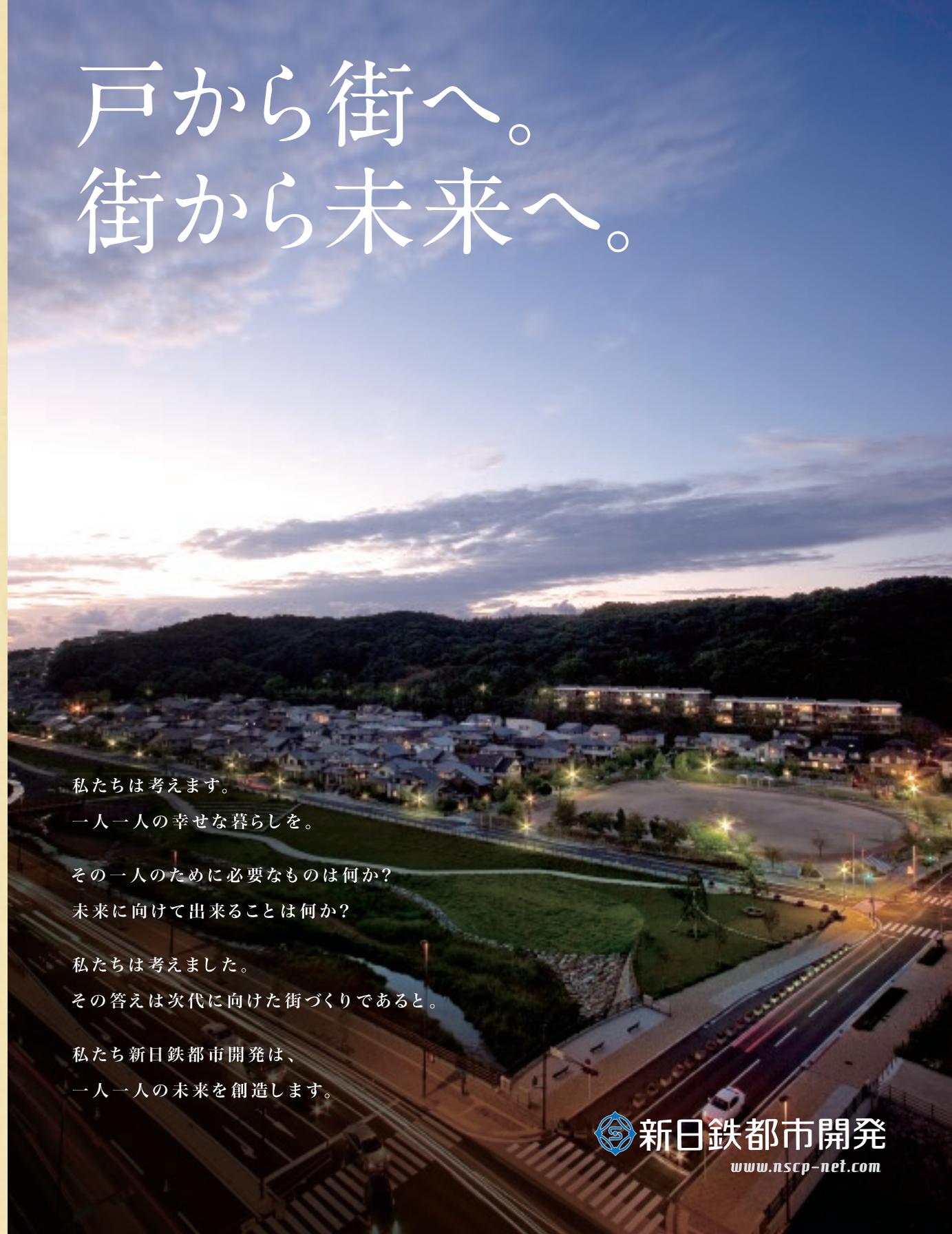
雲のうえ

11

九年
伊三未

北九州市

戸から街へ。 街から未来へ。



私たちは考えます。
一人一人の幸せな暮らしを。
その一人のために必要なものは何か？
未来に向けて出来ることは何か？
私たちは考えました。
その答えは次代に向けた街づくりであると。
私たち新日鉄都市開発は、
一人一人の未来を創造します。

セピア色の詩風景

小倉での「出会い」となると、わたしにとって人物よりも風景が先である。それも少年のころだ。一家がまた小倉に移ってきたのはわたしの小学四年生（天神島小学校）のときである。一時、且過市場の裏のほうに居たが、ほどなく中島何丁目かに小さな家を借りた。当時の中島は小倉市外であり、篠崎村となっていた。

借家のあるあたりは低地で、小倉製紙会社（現在の王子製紙）が紫川に流す、濁った白い廃液の通路になっていた。とくべつな施設があるわけではなく地面を掘りくぼめただけで、わずかに両岸に土堤らしいものをつくっていた。はじめは鼻をつく、廃液の異臭にたまらなくなるが、馴れてしまうと、アク（灰汁。廃液のこと）の臭いにも豆乳（豆腐の絞り汁）のような甘さをおぼえるようになった。よそからこの臭いの場所になると、わが家に戻ったような気がした。梅雨に増水すると横のイチジクの茂りが半分近くまで白い川に没した。低地の路地帯ははじめとし、梅雨期はナメクジが畳の上に長白い軌跡をつけた。

夕方になると、おびたしい数のコウモリが空を蔽って白いアクの川の上を飛びまわった。真黒い長い翼を大きく動かして衝突するように飛び交うのはみごとだった。どこからあれだけ多数のコウモリが毎夕出現するのかわからなかった。

目次

雲のうえ11号

エッセイ

1 セピア色の詩風景

文：松本清張

特集

4 清張さん。

写真：久家靖秀 文：大谷道子 題字：牧野伊三夫

※ボカージュ

彼のいた街。

11 点篇／『半生の記』を追いかけて。

文：大谷道子 絵：文字：牧野伊三夫

※ボカージュ

20 或る「小倉日記」伝（抄録）

作：松本清張 絵：牧野伊三夫

グラフィック

28 清張ごのみ。

あの味、この味、思い出の味。 写真：久家靖秀 文：つるやもも 文字：牧野伊三夫

※ボカージュ

36 と線篇／「清張さん」の来た道。

文：大谷道子 写真：久家靖秀 文字：牧野伊三夫

※ボカージュ

40 「清張さん」に出会う街。

インテグレーション

文字：牧野伊三夫

「雲のうえ11号」

2009年7月25日発行

題字、表紙の絵：牧野伊三夫

アートディレクション：有山達也 デザイン：岩淵恵子

編集：つるやもも、大谷道子 校正：藤藤晋
© 北九州市 2009
本誌記事・写真・イラストレーションの無断転載を禁じます。

草茫々の小倉城址もわたしは初めてなのでよく歩いた。そのころは人通りが少なく、天守閣跡の裏側などは昼間でも追剥ぎが出そうだった。長くつづく高い石垣の上に松林がむなしく茂っていた。小学校で「荒城の月」を習っていたころで、ひとりですれを歌って歩いた。

天守閣跡の大きな石垣の前を突き当たると、正面が小倉図書館だった。旧偕行社（陸軍将校の集会場）で、新しい偕行社ができるのを図書館に払い下げたのである。市が貧乏なせいか特に改造を加えるでもなく、うすよごれた四角な白い壁が殺風景だった。閲覧本の出入れの窓口には和田さんという小肥りの人が着物にセルの袴をつけて控えていた。窓口の奥をのぞくと、仕切りの向こうに井手館長の痩せた背中が、机の前にあった。井手さんは堺町小学校の校長だった人で、その息子はわたしと天神島小学校の同級生だった。なお同級には、クラスは違うが亀井光（現福岡県知事）がおり、一級下に副島謙（元小倉記念病院長）が居た。もちろんほかに想い出の顔はいっぱいある。

夏休みに炎天の下を歩いて図書館にたどりつくと、虫干しのために閉館という看板が出ていてがっかりした。閉まった門の間から見ると、裏庭の草に敷いたゴザの上に和本がいっぱいひろげてあり、和田さんが本といっしょに、ページをめくる短い棒を手に暑い陽を受けて座っていた。わたしは本の大切なことを和田さんから教えられたように思う。閲覧本の出入れのさい、和田さんの本の扱いはじつにいいね이었다。

小学校高等科のころにわたしは板櫃尋常高等小学校（いまの清水小学校）にかわったが、近道をするために、ポプラの木立が空を刺している練兵場をよく横断した。第十二師団司令部も城址内にあり、ときおり片手を軍服のポケットに入れた乗馬の将校を見かけた。同級生は、あれが桜井さんだとわたしに教えた。「肉弾」の桜井忠温中佐で、師団の高級副官をしていた。片手は日露戦争で失ったということだった。その娘さんが板櫃小学校の同級生だったということだが、われわれが高等科に上がったころは、彼女は西南女学校に進学していたとかで、わたしはついぞ見たことがなかった。京都に行き、智恩院前の桜井忠温筆「ここはお国を何百里、はなれて遠き満州の……」の碑を見るたびに、小倉城の石垣の前を悠然と行く騎乗姿の将校と、練兵場のポプラ並木と、曇天とがわたしの眼にうかんでくるのである。

それよりももっと幼い小学四年生のころ、香春口から北方まで鉄道馬車が通っていて、わたしが扁桃腺を腫らすたびに、母親がこの馬車に乗せて徳力の漢方医のもとに連れて行った。その煎薬が扁桃腺に効くからだったが、糞をたれる馬の尻と、ゴトゴト揺れる馬車の中で、母親の膝にもたれたわたしの病状を乗客に説明する母親の声が、その暗い情景といっしょにいまも戻ってくる。

——以上はわたしの色あせたセピア色の風景である。

*1
2度の統合を経て現・北九州市立小倉中央小学校。

*2
小倉工場はのちに十條製紙（現・日本製紙）に継承され、1966年まで操業。

*3
かめい・ひかる。1967～83年在任、86年没。

*4
さくらい・ただよし。日露戦争の従軍記『肉弾』は1906年に刊行、ベストセラーとなった。65年没。

特集

清張さん。

ちょうど一世紀前、

ひとりの男がこの世に生を享けた。

少年時代から不惑を少し超えるまでの日々を、

彼は、この街の二市民として過ごした。

松本清張。一九〇九年生まれ、小倉育ち。

戦前、戦中、戦後を通して、ひたすら働き、

ペンを執つてのちはひたむきに書き綴った巨人。

原稿用紙の上には残らなかったその人の気配が、

この街のあちこちに、今も色濃く漂っている。

歩けば出会う。話せば伝わる。

「清張さん」彼をそう呼べる、唯一の街で。

写真〓久家靖秀 文〓大谷道子 題字〓牧野伊三夫

5ページ／あどけなさの残る川北（かわきた）
電気企業社時代、松本清張 16 歳のポート
レート。眼差しは強い。拡大に使ったのは本
人のルーペ（松本清張記念館所蔵）。4ペー
ジ／子どもを連れて自宅付近のボタ山の上
から星座を眺めたという記述が自叙伝『半生
の記』にある。撮影の日は小雨、間夜だった。



6ページ／芥川賞受賞を報せる朝日新聞(1953年1月23日付)。7ページ／『点と線』の香椎(かしい)、『ゼロの焦点』の能登など、作品には印象的な海の景が多い。和布刈(めかり)神社のある関門海峡もまた『時間の習俗』に登場。潮の流れは速く、海峡を船が行き交うたび、大きく波を打ち寄せる。

は、自然に即興する人間性、その笑面の中に何かしら透徹したものが感じられるのである。会場の人たちもラジオをきく人も心から笑いにこぼれこぼれする。クイズによって得た金がとかく一時の金(クイズ)にしてもらいたい。(佐賀県、山口県) 二重橋(佐賀県)

乗越手数料暫処せよ
国鉄監理委員会
 国鉄監理委員会は二十二日午前



日本人の洋装を語る編著者長べ女史

十時から国鉄本庁同委員会第2通、通定定期乗越し手数料問題について協議した結果、世論の反響を慎重に見まもり、暫処するよう国鉄局に要請した。

鹿地事件で 26日に結論

衆院法務委員会

衆院法務委員会は「鹿地事件」調査の結果を出すため来る二十六日開議外相、大蔵法相、法務大臣長官の出席を求めるとのことになった。同事件は不法監禁問題として取上げられ、鹿地三郎氏や関係者からアメリカ方面に監禁されたとの証言があったため、外務省を通じてアメリカ大使館に反証や資料の提供などを求めていたが、公式に回答がないため最終的結論は俟たされていく。

女中が客を告訴

析とう師のお告げから 盗難を疑われて

波松市西町四丁目「春山」の方だとの神様のお告げがある

羅紗
 高級羅紗新見本
 申込募集 (但し紳士服専門業者に限る)
 福岡市東区東町
 電話東三三八八番
 N.Y. 株式会社 山内羅紗店

藤は物産科調査専門のなかで扱って開業人として詐欺被害で十六日大分県二重町署に逮捕されていることが判明、同市署に入った情報では同町署でも佐藤の盗難はテリ子さんをねらった狂言ではないかとみている。

芥川賞きまる 小倉の松本氏と 五味康祐氏に



第二十八回芥川賞選考委員会は二十二年後五時半から東京衆議院「選考室」で開かれ、川端康成、宇野浩二、井筒俊一氏が審査した結果、次の二氏に決定した。五味康祐「森神」(昭和十七年尾形) 松本清張「ある小倉日記」(二田文学九月号連載) 五條氏は大正十年生れ、早大英

鋼 鋼 鋼
 鋼 鋼 鋼
鋼 鋼
 鋼 鋼 鋼
 鋼 鋼 鋼

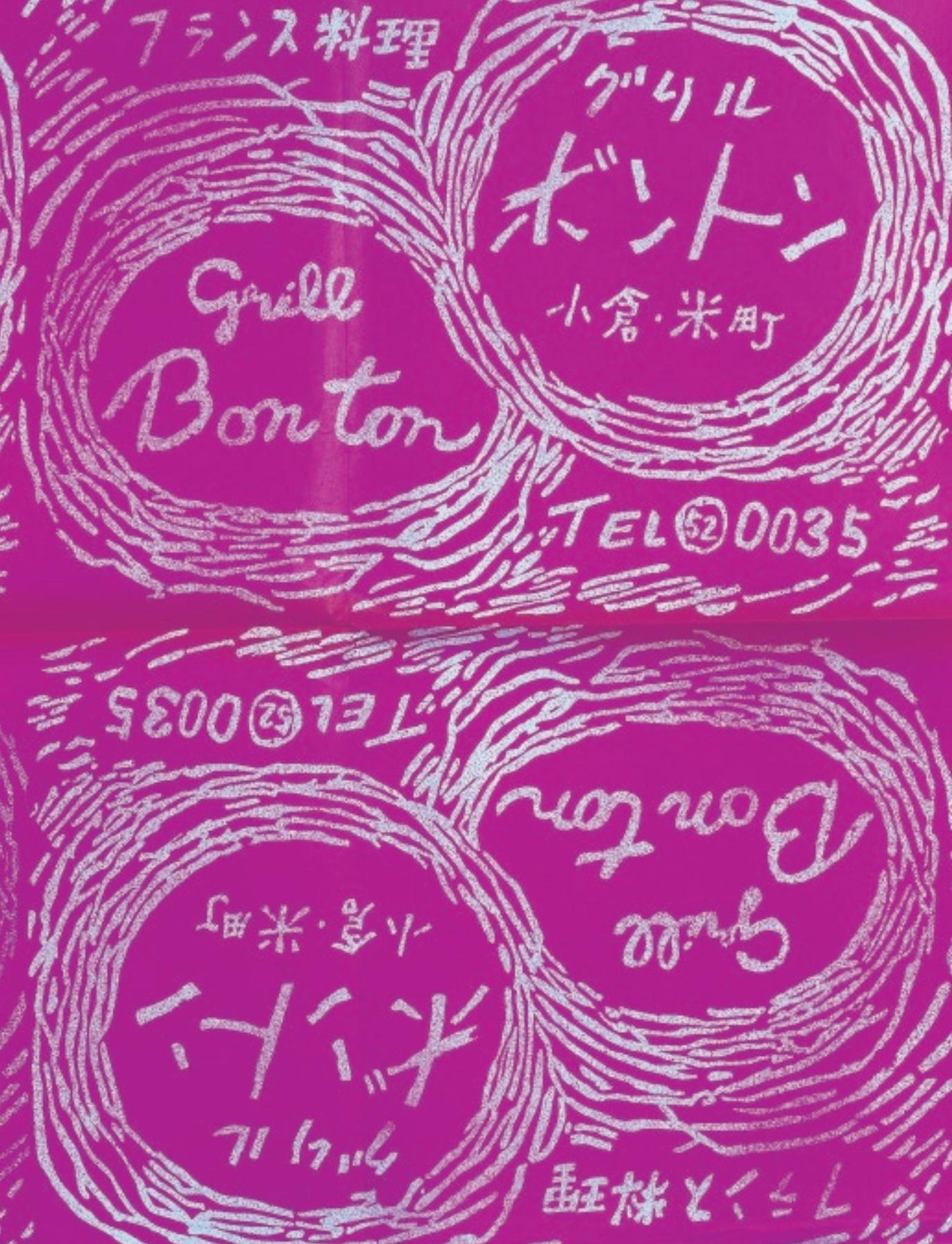
秩父宮さま二十日祭
 秩父宮さま陛下の二十日祭は二十三日、崎平と豊島町で行われる。なまげ式とは別に皇太子さま

風味がガンとよくなりました 御試し下

明治乳業
明治チー

今年も打とう...
定期ホームラン銀帝
 第20回





8ページ／1977年、小倉市民会館で開かれた講演会の来場者のため1500冊もの著書に署名（小野昭治氏所蔵）。「小倉の若者に話をしてほしい」との地元からの要望に応え、多忙な中、足を運んだ。9ページ／仏料理店「ボントン」に依頼されデザインした包装紙。版下工、図案家としての評価も高かった。



戦後、黒住（くろずみ。現・小倉北区）の自宅から砂津（すなつ）の朝日新聞社へ通勤するため、旧国鉄・漆田線の線路上を歩いた。該当区間は廃線となり住宅地に姿を変えたが、線路の名残をたたえた直線の道が残っている。

ルポルタージュ

彼女のいた街。

点篇／『半生の記』を追いかけて。

ルポルタージュ

文Ⅱ大谷道子 絵と文字Ⅱ牧野伊三夫

巨人の影

私事だが、実家には1冊のサイン本があった。『岡倉天心』その内なる敵』昭和59年新潮社刊。その年の春、著者は鳥取県日南町矢戸にできた自らの文学碑の除幕式に臨席。矢戸は、著者の父の出身地であった。当時放送局に勤めていた姉がそれを取材しに行く際、愛読者の母が託したのだった。

「お母さん、差し出した本に、著者は快くペンを執った。母の名を尋ねられ、姉が遠慮すると「それではいけない。お母さんの名前を言いなさい」と漢字の表記を質し、楷書で宛名を書いた。「怖そうに見えたけれど、とても丁寧に親切だった。風景を懐かしそうに眺めていた」とは姉の述懐。著者の名

は松本清張。昭和の大作家の名を意識した、それが最初の体験だった。

それから四半世紀ののち、作家の故郷で仕事をする機会に与っている。さらに今年には生誕百年という記念の年。偶然か、宿命か？——ひとりごちつつ、この春、『半生の記』を読み返した。

「私は、自分のことは減多に小説に書いてはいない。いわゆる私小説というのは私の体質には合わないのである。」自らあとがきに記すように、『半生の記』は氏にとってほぼ唯一の「自伝めいたもの」である。両親のプロフィールに始まり、幼児期、少年時代、青年期、そして故郷を発つ不惑前後までの回想が綴られている。

「……少年時代には親の溺愛から、十六歳頃からは家計の補助に、二十歳

近くからは家庭と両親の世話で身動きできなかった。——私に面白い青春があるわけはなかった。濁った暗い半生であった。」

トーンは徹頭徹尾、暗く重い。貧困断たれた進学の実。社会の荒波に揉まれ、孤独と不安が常に隣り合わせの青年期。消せないコンプレックス。長じても迫り来る生活苦、絶望——。それでも最後には文学で一筋の光明を見出すはず、と思いきや、作家はほとんどそれを描くことなく筆をおいている。

人生の、いわば夜明け前のもっとも暗い時期を過ごした街。「次の特集は松本清張」と発した直後から、「うわっ、怖（失礼な）」「ダークだね」と周囲から受けた反応は、作品から受ける印象に加え、この自伝の影響も少なからず、

いや大いにあるのだろう。

大丈夫だろうか。作家の前半生を取り巻いていた暗雲が、もくもくと迫ってくるように感じる。ましてや、作家は多くの作品において「過去」を執拗に描いてきた人だ。映像化された『砂の器』然り、『ゼロの焦点』また然り、過去を知る者の末路は、読者ならばご存じだろう。もしやこの身にも……とまで思わせる、巨人とは、つまりそういう腕力を持った存在なのである。

百年の街

初夏。小倉の空は澄んでいた。小倉城天守閣跡のまぶしい緑をくぐり、黒い構えの建物に入っていく。北九州市立松本清張記念館。11年前に開館した、清張研究の要塞である。

1階展示室の入り口には、数百冊の本の表紙がずらりと並ぶ。奥へ進むと、年譜に沿って自筆原稿や資料、取材靴やカメラなど愛用品が展示されている。映画『砂の器』のテーマ、あのドラマチックな「宿命」の旋律が響く。

2階には、在りし日の自宅の一部が



再現されている。夫人が「お父さんが出てきそうね」と言ったという玄関、編集者との熱い応酬が繰り広げられた応接室。書斎の執筆机、正面の壁に掛けられた時計は、作家が身罷った日に針が止まったままだ。その奥に、膨大

な資料を収めた博物館のような書庫が見える。今は静かな、作家の戦場。

「いまだに『或る』オグラ」日記伝」なんて言う人がいてね」

そう語るのは、館長・藤井康栄氏。文藝春秋の担当編集者として、作家と

ここ3年、かなり歩き回った場所だ。

十年一昔、というくらいだから、1世紀のギャップは大きい。下関から移り住んだ一家が最初に間借りしていた風呂屋、母校・天神島小学校はとうの昔に姿を消し、15歳で就職した会社はモノレールの高架とアスファルトの下だ。人と車が忙しく行き交う雑踏に、大正、昭和初期の影はもはやない。

且過市場と並行する通りを歩いていると、1軒の古本屋が目についた。

「……且過橋という橋を渡ると、角に古本屋があった。」という一節を思い出し、立ち寄ってみる。

店番をしていた店主夫人と話す。すると、『半生の記』に登場する店ではないが、以前、片野に構えていた店舗に作家はよく来ていた、とのこと。

「度の強い眼鏡をかけ、本に顔をうずめながら何時間も読んでいたそうです」(馬借『教養堂書房』田中弘子氏)

さらに『或る』小倉日記』伝』の白川病院のモデルではないかとされる曾田病院(堺町・現在は閉院)から本を仕入れる話などを聞く。訪ねれば何かつかめるのは、お膝元ならではの。

短篇『独身』を収めた『鷗外選集第2巻』を買い、辞去する。700円。

軍都の名残／再び城内

城下町から、商人の街へ——これまで勝手にそうイメージしていた。が、これでは小倉の歴史を語るうえで重要な要素が抜け落ちてしまう。明治以降終戦までここが日本有数の軍都であった、という事実である。

西南地方の防衛拠点であった小倉。とくに小倉城周辺地域は軍施設の中核であった。森鷗外が軍医部長として勤務した陸軍第十二師団の設立は明治31年。今は古びた煉瓦の門構えだけが残る。内部を歩くと、「花塚」「筆塚」「茶釜塚」の石碑の下で猫が昼寝をしていた。幕末までの藩主、小笠原家らしい旧跡。しかし、戦には弱そうだ。

清張氏もこの城址内、そして現在は緑地になっている練兵場を通学路にしていたらしい。藤井館長も「時代のイメージを捉えることが大切です。あの頃はモノクロ、カーキ一色の世界、軍人がいちばん偉かった時期」と言って

二人三脚で『昭和史発掘』などの作品を世に送り出してきた辣腕編集者である。清張氏と北九州の結びつきを追っていきたい、と取材の意図を伝えると、なんとも微妙な表情を浮かべられた。

「作家は『何をテーマにして描くか』が第一。だから、作品の世界は、作家の生活や実像とまったくイコールではないの。けれども『半生の記』でイメージを作ったこの街を訪れる人はとても多いのです」自身、この街へ来て「印象をずいぶん軌道修正した」と言う。

けれどご本人亡き今、唯一のテキストの重みはやはり……と続けると、「まあ、やってみてください。でもひとつだけ。『半生の記』は確かに大事な作品だけれど、そのまま本人に重ね合わせるとブレてしまう。そのことだけは申し上げておきますね」

謎かけのような言葉が、胸に残った。

縁の場所へ／古船場、且過

翌日から街のあちこちを歩き始めた。清張氏が幼少期を過ごした古船場、且過周辺は定宿の付近ということもあり、

いた。軍靴の音が高らかに響く中、作家はここで少年期を過ごした。

なだらかな丘に沿うように、緑色の曲線の屋根を背負った建物が見えてくる。北九州市立中央図書館。もと陸軍の施設があった場所に建てられていて、太平洋戦争末期、原爆投下の目標地点に定められてもいたらしい。

昭和50年、現在の建物が完成した際、清張氏は「イモムシみたいな形」と印象を述べ(3月5日朝日新聞)、丁重な自筆の目録を添えて、新築祝いに1000冊以上の著書を寄贈した。

「同じタイトルの本が3冊、5冊とあります。せっかく図書館へ行ったのを目当ての本が貸し出し中だったらがっかりするだろう、というお心遣いのです」(奉仕係・轟良子氏)

文学と少年・清張氏の接点を作った図書館には、ほかにもたくさんさんの資料が所蔵されている。芥川賞を受賞した『或る』小倉日記』伝』(↓20ページ)初出の『三田文学』には、作者名が「松本情張」と記されていた。「清張先生は情けのある方なので、笑ってすまされたのでは」と轟さん。

地下書庫には膨大な新聞の束が眠る。芥川賞を取った年のものを適当に開くと、そのページ、しかも挟んだ指の傍らに、受賞記事があった。私はここだよ。そう言っているかのように。

青春の日々

さらにあちこち、訪ねてみる。

若き日、文学を志向する仲間たちと集まった小倉北部の手向山から延命寺。かつては白砂青松の地だった海岸地帯は、埋め立てで工場地帯に姿を変えていた。わずかに残る松林の上を、関門からの海風が渡っていく。

和布刈神社、作家が両親と幼少時を過ごした対岸の壇ノ浦にも足を運んだ。まさかこの上に巨大な関門橋が架かることなど思いもしなかっただろう。

「……あてもなくバスに乗り、松ヶ枝というところで降りて、海岸を歩いた。(中略)もし、私にもっと直接的な動機があったら、あるいはそのとき自殺を企てたかもしれない。」

働きに働いた戦後。息抜きに訪れたという新門司地区も、埋め立てと宅地

化でやはり当時の面影は薄い。変わるのは、風景だけではない。作家の生きた時代の伴走者たちは、既に多くがこの世を去っている。が、ひとり、間接的ながら作家の若き日を知り、長じても深く関わってきたという人に話を聞くことができた。

小野昭治氏。老舗菓子店『湖月堂』の創業一族のひとり(現・株式会社オーエンオー会長)で、昭和15年生まれ。親愛の情を込め、作家を「清張さん」と呼ぶ。親交の深かった一家の中でも、小野さんがとりわけ強い絆を持つことになったのは、実はこの生ま



れ年に起因する。

「うちで清張さんといちばん仲がよかったのは、僕の叔父の(小野)五郎ちゃんという人。ふたりは『五郎ちゃん』『清ちゃん』と呼び合う遊び仲間だった。五郎叔父さんは15年の4月に戦死したけれど、出征前、僕の母(五郎さんの姉)のお腹に手を当てて『姉さん、次は男の子だね』と言ったらしい。結局、僕は叔父さんが戦死した2日後に6人きょうだいの5番目の長男として生まれた。だから清張さんは僕のことを生まれ変わりだと思ったんだろう」

御曹司と勤労青年がいかにして知り合ったかはわからない。が、ふたりは野球仲間がよかったという。

「叔父さんは店の倉庫からカルピスやケーキ、饅頭を箱ごと持ち出しては、野球の後輩たちに配っていた。そのときに『清ちゃん、一緒に来て』と頼んでいたようです。家族からは『あの人は……』と言われておったけれど、外では大変な人気者だった」

小野さんの手元に残る五郎さんの写真は、遺影に使われた1枚のみ。がちりした好男子である。小野さんは続

けて、こんな逸話を披露した。

「ハーレーダビッドソン事件」
祭りの夜、ハーレーダビッドソンのサイドカー付きバイク(小野さんの父所有。昭和初期にハーレー!)に乗って祭りに出かけたふたり。このとき、清張氏は母が夜なべして縫った浴衣を着ていたが、溝にはまって落車、浴衣はビリビリ。その後、清張氏の母のもとへ行き、ふたりで土下座して詫言した。

「ドキドキ初体験事件」
その祭りの際、清張氏は生まれてはじめて女学生と話したという。「ものすごく緊張した」と、のちに本人が小野さんに語っている。

「アルバイト事件」
印刷所で見習いをしていた清張氏は絵が上手。そこで五郎さんは、当時門司にあった大日本製糖(現・大日本明治製糖。門司工場は現・関門製糖)へ営業に行き、ポスターの仕事を受注した。五郎さんは弟の勤務先であった会社(創立記念祝いに饅頭(たぶん店から持ち出した)を持って行ったらしい。「あれは随分儲かった」と清張氏。「濁った暗い半生」? 「前途に暗い

思い」? 『半生の記』の記述に、次々「?」が湧いてくる。小野さんからも「そんなに貧乏じゃなかったんじゃないか?」との証言が。

「赤ん坊のときの写真があるでしょう(記念館所蔵)。明治42年生まれで、あんな立派な写真を残せた人が、この国にいったい何人おられますか?」

物書きとして類稀なるサービスピリットを発揮するうち、「成功した現在と暗い時代の落差が大きいほうが面白い」と思い、そんなふうに書いたんじゃないか」と小野さんは推測する。「もちろん、戦前戦後、苦しい時代は過ごしておるでしょうが、あの頃の日本人は皆そうやった。食べるものもない中を生き抜いてきた、清張さんもそのひとり」

もちろん、後年の執筆生活で見せた勤勉さは、当時から折り紙つきだった。のちに小倉から東京へ出た小野さんきょうだいを可愛がり、暇を見つけては会ったというが、あるとき高校生の小野さん(五郎さん譲りの野球少年)に「野球は面白いかね」と尋ね、「練習が苦痛です」と答えると「何事もそういうものだ」と告げたそうだ。



朝鮮戦争時、実際に起こった米兵による集団暴行事件を描き、ノンフィクション執筆に先鞭をつけた小説『黒地の絵』。現場の米軍城野(じょうの)キャンプはのちに陸上自衛隊駐屯地となり、昨年3月に移転。今は跡形もない。

清張氏が心の底から信頼を寄せていた小野さんの母・悦子さんは、常々子どもたちに「お前たちは努力が足りない。清張さんの爪の垢をもらって煎じて飲みなさい」と言っていたという。

「あの頃、もつといろんなことを聞いておけばよかった……」小野さんは懐かしそうに目を細める。揺らいでくる、重く暗い半生の輪郭。街にも、人にも、いい時代があり、暗黒の時があった。そして、青春があった。

まっすぐな道

何処だ。白昼の住宅街で首を傾げる。探しているのは、道である。『半生の記』最終章に描かれた、1本の道。

「草の生えた線路みちの途中には、炭坑があり、鉄橋があり、長屋があり、豚小屋があった。それが、そのころの私の道であった。」

田川の炭鉱で採れた石炭を運んでいた小倉鉄道を祖とする旧国鉄・添田線。清張氏が朝日新聞社勤務時代、通勤路として使っていたこの線路はどこにあるのか。調べるに、添田線は、昭

和30年代に他線との統合、分離を重ねたのち、昭和60年に廃線。しかも、清張氏が歩いたと思われる東小倉から妙見、石田方面へ向かう部分は、それよりずっと以前に廃止されていた。

昔の地図を頼りに探すも、辺りは一面の住宅街。が、1箇所、線路らしい細い直線道を発見した。住民に尋ねてみると、そうだと聞いているとの返答。方角的に正しい証拠に、住友金属小倉のまっすぐな煙突が道の先に見える。

このことを確かめるべく、手がかりとなる「炭坑」、つまりかつて付近に操業していた小倉炭鉱関係者に会うことにした。炭鉱の歴史を語り継ぐため結成された「菊ヶ丘『語ろう会』」の面々。清張氏が小倉在住だった昭和27年に出炭のピークを迎えた都市型炭鉱縁の人々である。40年に閉山しすぐ宅地化されたため、現在では炭鉱の存在自体を知らない人も多いという。

過去の地図と現在のものを照らし合わせながらの検証。その結果、先日発見した道は、線路の真上ではないものとても近い場所であることがわかった。さらに、川に架かる鉄橋の枕木に

は板が渡してあり「歩いている人はほかにもたたくさんいた」(発起人・森重国松氏)こと、鉄路を歩くのが通勤の最短距離であることなども知らされた。

さらに、『半生の記』の別の章に記述がある「家の近くのボタ山」はてっきり小倉炭鉱のことかと思っていたのだが、足立山西麓にはかつていくつかの小倉炭鉱があったということも判明した。会員は皆、80代前後と高齢だが、コミュニティは活きている。去年から炭鉱の歴史を後世に伝えるべく活動を開始し、今年発表会を予定している。清張氏の記念年は、この街における別の小さな挑戦の年でもあるのだ。

夏が近づいている。夜を迎えても空はまだ薄明るい。目を凝らしていると、ぼつぼつと小さく星々が光り始めた。

清張氏が亡くなって17年。時代は流れ、人々は去る。風景も日々、刻々と姿を変えている。

でもまだ、街はここにある。夜空に星と星をつないで星座を見出すように、出会った顔と声、その「点」を結ぶ作業に、取りかかることにした。

(↓36ページ「と線」篇に続く)

或る「小倉日記」伝（抄録）

作 〓 松本清張

絵 〓 牧野伊三夫

（明治三十三年一月二十六日）
終日風雪。そのさま北国と同じからず。風の一堆の暗雲を送り来るとき、雪花飄り落ちて、天の一隅には却りて日光の青空より洩れ出づるを見る、九州の雪は冬の夕立なりともいふべきにや。

（森鷗外『小倉日記』）

一

昭和十五年の秋のある日、詩人 K・M は未知の男から一通の封書をうけとった。差出人は、小倉市博労町二八田上耕作とあった。

K は医学博士の本名よりも、耽美的な詩や戯曲、小説、評論などを多くかいて有

名だった。南蛮文化研究でも人に知られ、その芸術は江戸情緒と異国趣味とを抱合した特異なものといわれていた。こうした文人に未知の者から原稿が送られてくることは珍しくない。

が、この手紙の主は詩や小説の原稿をみてくれというのではなかった。文意を要約すると、自分は小倉に居住している上から、目下小倉時代の森鷗外の事蹟を調べている。別紙の草稿は、その調査の一部だが、このようなものが価値あるものかどうか、先生にみて頂きたい、というのであった。田上という男は当てずっぽうに手紙を出したのではなく、K と鷗外との関係を知っている上のことらしかった。

K は同じ医者である鷗外に深く私淑し、これまで『森鷗外』『鷗外の文学』『或る日の鷗外先生』など鷗外に關した小論や隨筆をかきかいてきていた。現に、その年の春、『鷗外先生の文体』を雑誌『文学』に

る。

いれば聞こうというのだった。実際の例が書いてある。読んでみて面白かった。研究も草稿も途中のものである。完成させたら可なりのものが出来そうに思えた。文章もすっかりしていた。
彼は五、六日して返事を書いて出した。五十五歳の K・M は相手が青年であることを意識して、充分激励をこめた親切な手紙であった。
それにしても、この田上耕作という男は、どのような人物であろうかと、彼は思ったことである。

二

田上耕作は明治四十二年、熊本で生れた。明治三十三年頃、熊本に国権党という政党があり、大隈の条約改正に反対して結成された国粹党であるが、佐々友房が盟主で当時全国的にも有名であった。この黨員に白井正道という者がいて、佐々と共に政治運動に一生を送った。

白井には、ふじという娘がいた。美しいので評判であった。あるとき熊本にきた若い皇族の接待役を水前寺庭園につとめたが、林間の小径を導くふじの容姿は、いたく若い宮の心を動かした。宮は帰京すると、ぜひあの娘を貰ってくれと云い出して、側近を愕かせたと、今でも熊本に話が残ってい

発表したばかりであった。

K が興味を起したのは、この手紙の主が小倉時代の鷗外を調べているということである。鷗外は、第十二師団軍医部長として、明治三十二年から三年間を小倉に送っているが、この時書いた日記の所在が現在不明になっている。これは K も編纂委員である岩波の『鷗外全集』が出るに当って、その日記篇に収録しようと、当時、百方手をつくして探したのだが、遂に分らなかつた。世の鷗外研究家は重要な資料の欠如として残念がっていたものである。

この田上という男は丹念に小倉時代の鷗外の事蹟を探して歩くといっている。根気のいる仕事だ。四十年の歳月の砂がその痕跡を埋め、も早、鷗外が小倉に住んでいたということさえこの町で知った者は稀だと、この筆者はいうのだ。当時、鷗外と交遊関係にあった者は皆死んでいる。だから、その親近者を探して鷗外に關した話が残って

治療の方法はないということである。

自分の義理合ばかりで、この結婚をさせた白井正道も、このような不幸の子が生れたことに何か責任のようなものを感じ、大いに心配して、人にもいろいろきき廻り、治療費も出した。

白井は政治運動をやる一方、実業にも少しは手を出したとみえ、門司を起点とする九州鉄道会社の創立にも与かった。これが現在の国鉄鹿兒島本線になる。白井は、だから、この鉄道敷設の功労者の一人だ。

田上定一が九州鉄道会社に入ったのは白井の世話による。田上の一家は勤めの関係で小倉に移ったが、これは耕作が五つの時であった。白井はこの地の博労町に地所を買い、娘夫婦に家をたててやり、五、六軒の家作もつけた。もともと政治運動に没頭して、伝来の家財を蕩尽した白井は、金儲けは下手で、生涯これという産はなさなかつた。ふじが親からして貰ったのは、この家くらいのものである。

博労町は小倉の北端で、すぐ前は海になっていた。海は玄界灘につづく響灘だ。家には始終荒浪の音がしていた。耕作はこの浪の響をききながら育った。
耕作には、六つぐらいの頃、こういう一つの思い出がある。

父の家作に貧しい一家があった。老人夫婦と五つぐらいの女の子であったが、夫婦

はこの子の親ではないらしかった。

六十ぐらいの、その白髪頭のじいさんは朝早くから働きに出て行った。色の褪せた法被をきて、股引をはき、わらじを結んでいた。じいさんは手に柄のついた大きな鈴をもっていて、歩きながらそれを鳴らすのである。

耕作の両親は、この一家を『でんびんや』と呼んでいた。『でんびんや』は、どうやらじいさんの職業であるらしかった。でんびんやとは何のことか耕作には分らなかった。が、彼はよくおじいさんの家に遊びに行つて女の児と遊んだ。女の児は眼の大きい、色の白いおとなしい子であった。彼が遊びにゆくと、ばあさんはよろこんで、干餅などを焼いてくれた。

耕作の言葉は舌たるくて、たどたどしく、意味が分らなかつた。左足は麻痺で、跛だ。じいさん、ばあさんが彼に親切だったのは、家主の子という以外に、こういう不幸な身体に同情したのである。彼は後年こういう憐愍には強い反撥を覚えたが、六歳の彼にはまだこのような感情がある訳でなく、老夫婦の歓待に甘えた。女の児は、お末ちゃんといったが、他に遊び友達のない彼にとっては唯一の相手だった。そして、いつてみれば、彼が最初にほのかに愛した子であった。

じいさんは朝早く家を出て行って、耕作

がまだ床の中にいる頃、表を通った。ちりんちりんという手の鈴の音は次第次第に町を遠ざかり、いつまでも幽かな余韻を耳に残して消えた。耕作は枕にじっと顔をうずめて、耳をすませて、この鈴の音が、かぼそく消えるまでを聞くのが好きだった。それは子供心に甘い哀感を誘った。日が暮れて、じいさんは帰りも通る。

ああ、今、でんびんやさんが帰る、と父も晩酌を傾けながら、鈴の音が耳に入ると、呟くことがあった。じいさんは、そのようにおそくまで働いた。秋の夜など響灘の波音に混つて、表を通る鈴の音をきくのは、淡い感傷であった。

この、でんびんやの一家は一年ばかりいて、突然夜逃げをしていった。六十をこしたじいさんの働きではやって行けなかつたのである。耕作が行つてみて、家に戸が固く閉り、父の筆で『かしゃ』の紙が貼つてあるのは、何か無慙な気がした。

耕作は老人一家が今頃どうしているであろうかと度々考えた。じいさんの振る鈴の音はもう聞けなくなつた。若しかすると、知らぬ遠い土地で、あの鈴を鳴らしているのかも知れないと思うと、ひとりで、その土地の景色まで想像した。

この思い出は、彼を鷗外に結ぶ機縁となるのである。

三

田上定一は耕作が十歳の時に病死したが、死ぬまで耕作の身体を苦しめた。言葉のはっきりしない、口も始終開け放したままで涎を溜めている跛のわが子の姿は親として堪らなかつたのである。いろいろな医者にかかった。近在ばかりでなく博多、長崎まで連れて行つたが、どこの医者も首を傾けた。はっきりした病名さえ分らない。祈禱や民間療法のようなものにも迷つた。田上家の財産らしいものは、殆どこの子の無駄な療養に費消された。

定一が死んだ時、ふじは三十歳であった。ようやく中年に達して、美貌は一種の高雅さを添えた。再縁の話は諸所から持ち込まれた。熊本の方から相当な話があつたのは、十年前、聞えた美人であつたからである。

その一切をふじは断つた。縁談の中には随分うまい話もあつて、耕作の療養にはどんな大金も惜しまず注ぎ込んでやるというのもあつた。が、ふじはそういう相手の申出は、どこまでが本当であるか分らず、いつてみれば好餌としか考えられなかつた。どこに縁づくにしても、耕作を手ばなす気にはなれず、連れてゆけば、こういう病氣の子が婚家先でどんな扱いをうけるか、知れていた。彼女は生涯耕作から離れまいとし、

再婚の意を絶つた。生計は切りつめてゆけば、五、六軒の家作の家賃で立ててゆけた。耕作は小学校に上つたが、口を絶えず開け放したままで、言語もはつきりしないこの子は、誰がみても白痴のように思え

た。が、実際は級中のどの子よりもよく出来た。話が出来ないので教師は口答はなるべくさせなかつたが、試験の答案はいつも優秀だった。これは小学校だけの間でなく、私立の中学校に上らせたが、ここではズバ

抜けた成績をとつた。

ふじのよるこびは非常であつた。これが正常な身体であつたらと、不覚に涙を出すこともあつたが、ともかく頭脳が人並以上と思えたことは、うれしい限りであつた。母一人、子一人である。こんな身体でも、ふじからみれば杖とも柱とも頼りに思えるのであつた。

その頃、すでにふじの実父白井正道は死んでいた。一生を政治運動に狂奔したから死んでみると遺産はなく、借金が残つた。白井家は熊本藩の家老の家柄で名家であつたが、正道一代で家財を蕩尽してしまつた。遺族は借金にいつまでも苦しまねばならなかつたから、ふじは実家から何らの助力も得られなかつた。

学校の成績のよかつたことは、耕作自身にも、多少、世間に対して自信らしいものをつけさせ、不具者がつ、ひげ目な暗い気持から救つた。が、やはり孤独はまぬがれない。彼は文学書を好んでよむようになった。

耕作の中学時代からの友人に江南鉄雄という男がいた。江南は文学青年で、この地方の商事会社につとめながら、詩など書いていた。勤務中でも、ひろげた帳簿の下に原稿紙をしのばせて、こっそり何かかいているような熱心さだった。彼は耕作と不思議に気が合つて、耕作の生涯中、ただ一人





の友人であった。

ある日、江南は耕作に一冊の小説集をもってきて見せていった。

「これは森鷗外の小説だが、この中の『独身』というのを読んでみる。鷗外が小倉にいた頃のことを書いてあるから面白いよ」

耕作はそれを借りて読んだが、その中の文章は図らずも彼の心を打った。あまり感動が大きくて、数日はそればかりが頭から離れなかった。それは『独身』の中の次の一節だ。――

「外はいつか雪になる。おりおり足を刻んで駆けて通る伝便の鈴の音がする。」

伝便と云っても余所のものには分るまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられている二つの風俗の一つである。(略)

今一つが伝便なのである。Heinrich von Stephan が警察官に生れて、巧に郵便の網を天下に布いてから、手紙の往復には不便はない筈ではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用弁の事である。一日の間の時を以て算する用弁を達するには、郵便は間に合わない。

Rendez-vous をしたって、明日何処で逢おうなら、郵便で用が足る。併し性急な恋で、今晚何処で逢おうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割く

嫌がある。その上厳めしい配達の方が殺風景である。そういう時には走使が欲しいに違いない。会社の徽章の附いた帽を被って、辻辻に立っていて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買って邪魔になるものを自宅へ持って帰らせる事でも、何でも受け合うのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わっている紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云っているのが、この走使である。

伝便の講釈がつい長くなった。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞えるのである」

耕作は幼児の追憶が蘇った。でんびんやのじいさんや女の児のことが眼の前に浮んだ。あの時はでんびんやとは何のことか知らなかった。今、思いがけもなく、その由来を鷗外が教えた。

「戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音が、ちりん、ちりん、ちりん、ちりんと急調に聞えるのである」は、そのまま彼の幼時の実感であった。彼は枕に頭をつけて、じいさんの振る鈴の音を現実に関心していた。

耕作が鷗外のものに親しむようになったのは、こういうことを懐しんだのが始まりだったが、鷗外の枯淡な文章は耕作の孤独な心に応えるものがあつたのであろう。

(後略。以下、十一まで続く)

作品について

「……この人は、探求追求というような一つの小説の方法を身につけているようだと分りました」

(芥川賞選考委員・瀧井孝作氏の選評より) 『三田文学』1952年9月号に発表された本作品は、実在の郷土史家・田上耕作が森鷗外の小倉在任時代の足跡をたどる伝記形式のフィクション。明治のエリート中のエリートが「地方都市で過した日々に、生まれつき身体の障害と明晰な頭脳を持った主人公が生涯をかけ、ひたひたと追っていく。田上の年齢は、史実より10年近く引き下げられている。1909(明治42)年生。作家と同一年に設定された孤独な文学青年が、不自由な身体を引きずり苦闘する、その息詰まる描写は、まるで作家自らの生のありさまを重ねているかのように熱を帯びる。」

しかし、筆は決して同情に溺れない。「空虚な、他愛もないことを自分だけが物々しく考えて、愚劣な努力を繰り返しているのではないか。――(九)主人公の煩悶に安易な回答を与えることなく、最後はその生を、只人の宿命の中に沈める。」

人は何のために生き、そして死ぬか。人間、その営みへの篤いシンパシーと神の視点を併せ持った、堂々たる出世作。下書きは「勤めから帰って毎晩うす暗い電灯の下で仙花紙の黒い紙に鉛筆で書いた」と成瀬書房版(1980年)の「うしろがき」にある。

収録に際しては、『松本清張全集 35/或る「小倉日記」伝(短篇1)』(文藝春秋・1972年)を底本とした。

(編集委員・大谷道子)

高橋留美子展

It's a Runic World

8.22[±] - 9.20^日 会期中無休

リバーウォーク北九州5F
北九州市立美術館分館
 KITAKYUSHU MUNICIPAL MUSEUM OF ART, RIVERWALK GALLERY
 〒803-0812 北九州市小倉北区室町一丁目1番1号 Tel: 093-562-3215
<http://www.kmma.jp>

開館時間 / 10:00 - 20:00 (入館は19:30まで) 主催 / 北九州市、
 (財)北九州市芸術文化振興財団、読売新聞西部本社、小学館、
 FBS福岡放送 後援 / 九州旅客鉄道株式会社、西日本鉄道
 株式会社、北九州モノレール、筑豊電気鉄道株式会社 協力 /
 サンライズ 企画協力 / ShoPro
 (依頼)北九州市漫画ミュージアム開設準備事業

チケット料金(税込)
 当日 / 一般 1,000円、高・大生 700円、中学生 500円、小学生 300円
 (前売 / 一般 800円、高・大生 600円、中学生 400円、小学生 200円)

プレイガイド
 ローソンチケット(Lコード: 83920)、チケットぴあ(Pコード:
 688-758)、セブンイレブン

お問い合わせ 北九州市文化振興課 093-582-2391 開催期間中は 093-562-3215



アートを
感じる
ホテル

千草ホテル
Chigusa Hotel



<http://www.chigusa.co.jp>

巨大な人間劇場は日々開幕する

松本清張生誕100年記念事業 主要ラインナップ

全国巡回展

「松本清張展—清張文学との新たな邂逅」を開催。
 姫路文学館(7月31日~9月13日)
 仙台文学館(10月1日~11月23日)
 高知県立文学館(12月1日~1月17日)

清張原作舞台上演

清張ゆかりの劇団前進座による清張作品の舞台劇。
 演 目/或る「小倉日記」伝 ※芥川賞受賞作品
 開催日程 / 10月2日(金)~4日(日)(3日間)
 2日(金)チャリティー公演※一般発売なし
 場 所 / 北九州芸術劇場中劇場

清張ウォーク

清張作品ゆかりの地(26コース)を歩くウォーキング大会開催。
 清張ウォークバスポートを手に大会参加。
 5大会完歩ごとに記念品をゲット。

記念講演会(東京)

記念事業のフィナーレを飾る著名作家による講演会
 2010年1月予定

※この他にも各種イベントを開催予定です。



SEICHO MATSUMOTO 100th Anniversary Year | 2009 Kitakyushu City

松本清張 生誕100年

2009年 北九州市



お問い合わせ
松本清張生誕100年記念事業実行委員会事務局
 TEL093-582-3275 <http://www.seicho-100.com>
 〒803-8510 福岡県北九州市小倉北区大手町1番1号

北九州市立
松本清張記念館
<http://www.kid.ne.jp/seicho>

〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区城内2番3号
 開館時間: 午前9:30~午後6:00(入館は午後5:30まで)
 休館日: 年末(12月29日~31日)
 観覧料: 一般 500円(400円) 中高生 300円(240円)
 小学生 200円(160円) ()は30人以上の団体



あの味、
この味、
思い出の
清張
ごのみ。

写真||久家靖秀 文||つるやももこ
文字||牧野伊三夫

握り、一人前 『寿司もり田』魚町

清張さんを初めてお見かけしたのは、戦後すぐのころだったかな。わたしが、魚町の『天寿し』へ修業に入ったのが昭和25（1950）年。3年後、板場に立たせてもらうようになってしばらくたってからのことでした。

初めての印象？ 目です。何より目でしたねえ。ギョロっとして鋭くて、ただものやない感じでした。着古した上着を羽織って、無造作な髪型、身なりには気を使っていない感じでした。でも、当時は何もかもがそんな時代。みんな同じ（生活）でしたからね。あと、大きな縁の、度の強い眼鏡をかけて。大きな書類袋を抱えていて、ポケットは、何が入っているのか、膨らんで下がっていました。そんなときは、まだ清張さんとは知らなかったからね。ただ、新聞社の人、という認識があった。その人が、黙って席に着くな

り「一人前」と。それきり何も言わない。黙って食べて帰られた。速かったですよ、食べるの。当時は、寿司をお好みで握るといのはなかった。お客さんには「皿盛り」という形で出ていました。7寸（約21センチ）の皿に8貫ほどが載って一人前。並には、あなご、いか、たこ、エビ、白身、鮪（カジキ）、季節によって貝なんかが入る。奈良漬かキュウリを握った寿司も必ず入っていた。当時で350円やっただかなあ。今なら3〜4000円くらいの値段。当時は、米も含めて食料はすべて貴重な時代だったから。寿司を食べに来るといことは、余裕がなくではできませんよ。

清張さんは、だいたい（上京までに）4〜5回はいらっしやっただかなあ。結局最後まで、何も語らず、わたしも何も言わずでした。しばらくたっ

て、お客さんに教えてもらって、本手に取ったんです。『黒地の絵』ですか。本当にあつた事件でしたからねえ、あれは。それで、偶然著者の写真を見つけて、あらっ！ とびっくりして。あのお客さんは、こんなすごい本を書く人だったんや。現実をとらえて、よく書けたもんやなあ、と感心しました。

今年でうちの店が（開店して）29年目なんです。『天寿し』さんに勤めていたのは30年間ですか。清張さんに初めて会ったあのときは、自分とはにかく若くて、寿司を握るだけでせいっぱい。お客さんが文句言わずに帰ってくれるのだけを、願っていたころだった（笑）。今だったら、あるいは、清張さんがあと少しだけ小倉に長く居られたら、勇気を出して話しかけることができたかもしれませぬね。

（大将・森田順夫氏 談）

なつめ
棗の実

『半生の記』の中で、少年だった清張氏が、一時だけ離れて暮らしていた父に思いがけず再会する場面。そこに、棗の実はいかに、幼いころからの好物として登場する。木賃宿の座敷で包み紙代わりの新聞紙を広げ、買ってもらった棗の実をほおぼる少年。その様子を、あぐらをかいて眺める父。「私は、あの鶏の卵のような斑（ふ）のある、いくらか蒼味のかかった果物が好きである。はさばした舌ざわりの中から滲み出る甘酸っぱい液汁が好ましい。」少年に刻まれた父との記憶の味は生の果実。季節には早く、写真はドライのもの。

珈琲

清張氏の執筆の傍らにはいつも、煙草と珈琲があった。特に煙草は、ひっきりなしに吸い続ける姿が、作家を知る多くの人々の記憶に深く刻まれているようだ。珈琲については、こんな逸話がある。清張氏の青春時代の親友である小野五郎氏（→15ページ）の兄である研二氏と妻・悦子さんが営む魚町にあった「Café de ONO」に、清張氏は、芥川賞受賞前後、よく足を運んでいたという。いつも決まった席に着いて一杯をおいしそうに味わい、ときに、清張氏が生涯姉のように慕っていた悦子夫人と会話を愉しんだ。現在、店は小倉井筒屋の本館2階にある。



マテ貝

春から初夏にかけて旬のマテ貝は、アサリなどとともに干潟に生息する細長い二枚貝。輪ゴムで束ねて売られる様子は、貝というよりクレヨンか鉛筆のようだ。市内の市場でもよく目にすることができ、酢味噌和えや煮付けは、今も郷土の味として親しまれている。しかし、輸送に弱いなどの理由から、産地以外に広く出回ることはまれで、それゆえに貴重な味。東京へ移り住んだ清張氏は、ときにこのマテ貝の味を懐かしんでいたという。写真は小倉南区曾根漁港にて。沸騰した湯で数分ゆでたものを、生の山椒を練り込んだ甘めの酢味噌を付けて。

栗饅頭『湖月堂』魚町

小倉時代、そして、東京に移り住んでからも好んで取り寄せた味に、明治28年創業の菓子店『湖月堂』の栗饅頭がある。清張氏がまだ幼かったころから、すでに地元で名の通っていた老舗の菓子は、少年の憧れの存在だった。やがて学校を卒業し、広告図版の仕事をしていた28～29歳のころには、デザイナーとして『湖月堂』のショーウィンドウの飾りつけを依頼されたこともあった。作家となった清張氏はのちに、店の依頼で綴った文章の中で、「湖月堂の思い出」と題し、銀座や新宿の街を彩るショーウィンドウを目にするると当時を思い出す、と語っている。





ラーメン、フカヒレ載せ

『中国料理 耕治』 魚町

亡くなった初代、わたしの父・平野耕治が、松本清張さんに初めてお会いしたのは、清張さんが芥川賞を受賞されて間もないころでした。

わたしの伯父にあたる父の兄が、当時、魚町で『グリル・ポントン』（↓9ページ）という洋食店を営んでおりました。そこへ清張さんがよく食事に行っていたのがきっかけです。父はちょうどそのころ、伯父の店の手伝いをしていた、小説家を目指していました。ですから伯父を通じ、清張さんにお会いすることになったというわけです。

憧れの清張先生に、自分の作品を読んでもうただけのことを、父はあとあとまで大切に、とても喜んでおりました。そのときのことを振り返って、文章にも残しています。文学青年だった父が清張さんへ原稿を差し出すと、清張さんは、「君の作品はスケッチの

ようだね」とおっしゃったそうです。そのときの出会いをきっかけに、清張さんとは、40年間もお付き合いをさせていただきました。

父と清張さんの出会いから間もなく、清張さんは小倉から東京へ移って行かれました。父も生まれ故郷である東京へ一度戻りましたが、しばらくして、伯父に勧められて小倉で商売を始めました。

店を持つてから、清張さんには、うちが持ち帰り用として今も店頭にご用意しているラーメン（2食入り1170円）をフカヒレの姿煮と一緒に1170円）をフカヒレの姿煮と一緒に1170円）をよくご注文いただきました。清張さんの執筆は夜だったと聞いています。好んでうちのラーメンを夜食にしてくださいました。セツトが届くと「これがあると原稿がはかどる」と喜んでくださいました。しばらくする

と、電話で「また送ってくれ」と、注文が入ったそうです。

父は、商売の傍ら『提灯記事』という小冊子を自ら編集し、作っていました。年4回発行して、30号は続いたでしょう。あるとき清張さんが「原稿集めに苦労しているようだね」とおっしゃったそうです。父がその冊子の中で、いくつも名前を使い分けて原稿を書いていたことを見抜かれていたようでした。

清張さんが自ら寄稿してくださいましたことでもあります。そのときの生原稿と校正紙は、今も大切にっております（↓18～19ページ）。校正は、東京の清張さんと小倉の父との間で、郵送で何度か行き来したようです。清張さんは、それだけ自分の文章に対して、真剣に取り組む方だったんでしょね。

（主人・平野桂之介氏 談）

彼のいた街。 と線篇／「清張さんの来た道。」

出発／砂津から中津口へ

承前。「点」とくれば「線」……ということで、『半生の記』を巡る小倉の旅の締めくくりとして、「清張氏の通勤路を歩く」旅を始めることとした。題して「ひとり清張ウォーク」。単純？そう、旅行者は、いつだって動機も行動も単純なのだ。

5月某日、風の強い午前10時35分。砂津のバスターミナルに隣接する「チャチャタウン小倉」からスタートする。最新版の住宅地図、菊ヶ丘「語ろう会」の方からもらった昭和36年版の地図のコピー、さらに松本清張記念館の図録にあった、清張氏の通勤路を示す地図を携えて。

チャチャタウンを背に国道199号

歩く／妙見方面へ

11時を回り、陽はいよいよ高い。足立山麓へ向かい、引き続き道を行く。道が正しければこの先に、広寿山福聚寺がある。

小笠原家の菩提寺は、本当に美しいところだった。入ってすぐの大銀杏。季節ごとに彩りを添えるであろう藤や紅葉、桜などの木々。風格のある本堂



小笠原家初代藩主・小笠原忠真（ただかね）が創建した黄檗（おうばく）禅宗の名刹。開祖・即非如一（そくひ・によいつ。中国僧）禅師の像の印象は、作品中に、「即非の顔は怪奇であった」と綴られている。

線を挟んで左手。ここが、清張氏が戦中戦後勤務した朝日新聞西部本社跡地である。社屋は平成15年に移転し、現在は更地。それを右手に見ながら、国道3号線を右折し、南へ向かう。

国道沿いは高層マンションやビル、パチンコ店など、地方都市どこにでも見られる風景。富野口付近を過ぎる。前方、朝から元気な安売店『ドン・キホーテ』が見えた。中津口交差点。宇佐町方向へ左に折れる。雲の影が落ちてくる。

歩く／宇佐町界隈

10時55分、都市高速の高架をくぐり、二股に分かれた道の左側へ入る。ここではじめて、新緑をまとった足立山が

に、背景の圧倒的な緑。鷗外が新妻と、『或る「小倉日記」伝』の主人公が女性とともに訪れた場所である。壮年の住職は、清張氏がここへやってきたときのことを記憶していた。

「掃除をしていたときだったか……ひとりで来られて、あちこちをじっと観察されておられたのを見かけました」（住職・黒田文豊氏）

別の日には、広寿山に作家と同行し

正面に姿を現す。

道の両側はのんびりした商店街。11時ちょうどに着いた「宇佐町市場」もローカルな雰囲気だ。惣菜屋、八百屋。奥には魚屋。店先で蛸を洗っている店主に尋ねたところ、50年以上前から市場はここにあるとのこと。「前の道は舗装してなくて、砂利道の上をバスが通っていた」清張氏はおそらく、もうもうと立ちのぼる土煙の中を歩いたのだろう。

昭和36年の地図によれば「大畠入口」に当たる（であろう）分かれ道の右側に行く。たぶんこの道で、旧添田線線路方面、清張氏の住居に近い黒原方面へ向かっているはず。穏やかな上り坂。そして、この左手には、かつて小倉炭鉱があったのだ。

たという人にも偶然、会うことができた。小倉在住の郷土史家・今村元市氏。印象は「とにかく聞き上手な人」だったという。当時ふたりが交わした会話は、昭和59年刊の『清張日記』（日本放送出版協会）に記録されている。

「私の言った言葉を一言一句違わず覚えておられた。あのととき黒い鞆をお持ちだったが、中に録音機が入っているのかと思わず尋ねたくらいだ」

街の人々の心に残る、作家との邂逅のひとつ。11時15分、古いほうの地図で「熊本入口」と思われる地点を過ぎ、さらに道なりに行く。すると「妙見通り商店街住居案内図」が現れた。このまま進めば、先日発見した「旧添田線跡らしい道」（↓10ページ）に合流するはずである。

歩く／中津街道にて

11時20分。ついに到達した。振り返ると、確にかつて見た、まっすぐな煙突が見える。ささやかながら点と線がつながったことに、ひとり拳を握り締める。

しばらくすると旧線路（に近い）道は行き止まりになってしまったので、道なりに左に折れる。途中、小川や細い道に惹かれて脱線。そのたび慌てて

倉から中津へ通じた中津街道である。」書き出しから追っていくと、中津街道の起点は紫川むらさきがわに架かる常盤橋とぎわばし東側。紫川に沿って船場町へ、左折して魚町



神嶽（かんたけ）川支流に架けられた旧添田線の鉄橋跡。現在は上に住宅などが建てられているが、随所にその痕跡が見つけられる。清張氏が歩いた戦後の頃、周囲には見渡す限り、広大な田畑が広がっていたという。

軌道修正をする。

11時40分。学校らしき建物の脇で「中津街道の跡」と書かれた看板を発見した。

「この南北に走る道が、江戸時代小

から且過の信号を渡り……とある。これは実のところ今日、ここまで歩いてきた道そのものであった。清張氏は会社からの最短距離を歩いたと同様、この歴史ある街道を歩いたのだ！ そし

歩く／心の小倉

11時50分。小さな公園を見つけた。足原公園。入り口付近に「足立土地区画整理事業竣工記念」と記された石碑がある。昭和35年5月のもの。ベンチに座る主人のもとからやってきた柴犬と一緒に、文字を目で追う。「此処、足原は秀峰足立山の麓、水清く、緑濃き地にして市民の憩の地なり。」困難を乗り越えて街区を整えた人たちの誇りが溢れる文面。郷土への強い愛情がうかがえる。松本清張は小倉を憎んでいた——、というまことしやかな話がある。若い頃の貧困、生活苦、コンプレックス、差別……そんな場所を懐かしむはずがない、という。『半生の記』の暗い記述も、きつとそれに結びついている。けれど、この街で出会った人たちは、皆それを否定する。再び、小野昭治さんの話。「清張さんは小倉が好きやった。すごく気になる人やった」東京で会うたび「あの人は元気か。どうしているか」と知己の消息を尋ね、たまの帰省時には「どこそこへ連れて行ってくれ」と頼んでは、懐かしそう

に景色を見渡し、写真を撮っていた姿。終生、地縁、親交のあった間柄を大事にし、何くれとなく世話を焼いた人だった。亡くなる直前にも、当時目を病んでいた小野さんの母・悦子さんの容態を気遣い、姉とともに東京に呼び寄せていたという。「あんな親切で情の厚い人、僕はほかに知らない」傍らの柴犬はいつの間にかいなくなっていた。碑文を写し終え、こちらにも再び歩き出す。足立山、眼前にいよいよ大きい。歩く／緑の中、そして黒原いよいよ大詰め……と思ったところで、また道を外れた。勘にまかせて住宅街を歩き、広く美しい公園に突き当たる。遊んでいた親子連れから、足立山森林公園であると聞かされた。地図を開いて確認すると、今歩いてきた道が、どうやら清張氏が戦後、朝日新聞西部本社の通訳・竹野幸一郎氏に英会話を習うため、遠回りしていた

て自分も！ 再び湧き立ち、看板の文字を夢中で書き写す。

ふと、校舎から出てきた子どもたちに奇異の目で見られていることに気づく。そういえばここまでにも、記録写真を撮っていて「何しよん？」と何度か声をかけられ、あからさまに不審の目も向けられた（1人目の事情説明で手間取り、2人目以降は「地理の勉強をしています」でやり過ごした。まあ、嘘ではない）。陽射しもますます強くなり、通り過ぎる人々を見送って、じわりと汗をかく。

「こんなことを調べてまわって何になるのか。一体意味があるのだろうか。」『或る「小倉日記」伝』終盤の、主人公・耕作のモノローグが、この胸の裡にも湧いてくる。そして同じくかつて小倉のあちこちを取材して歩いた作家もまた、こんな思いを抱いたのかもしれない。とてつもなく阿呆なことをしているような、それでもやらねばならないような。

道のようなのである。なんとたる偶然。

このままそのルートを追うことにする。「ひとり清張ウォーク」、ここからはポーナス・トラックだ。

森林公園から妙見方面へ。古い地図上にある小川も見つかった。ここは昭和20年代の風景をとどめているのかもしれない。地図に合わせてぐるりと巡る。そのカーブは、平和公園の外周に重なった。ここにも光が溢れている。「緑でも眺めていたらどうかね」という計らい、とすら感じる。

12時40分、目標の黒原交差点へ到着した。脱線、寄り道、また脱線を経て、約2時間の旅。

半世紀以上前、「草の生えた線路みち」を歩いてきた男は、故郷への思いを胸に東京へ旅立ち、作家になった。そして昭和を描き切り、天に昇った。目の前はアスファルトの幹線道路。これが、現在の道。時は変わっても、街はあり、道はある。「清張さん」一度、そう呼んでみたかった。

帰りはバスに乗った。さんさんと降り注ぐ陽射しの中、都心まで20分の旅だった。（了）

意志を持つ、永遠のフォルム。

何億年も前の地球の歴史を刻み、
かけがえのない地球をかたち創っている
大地のいしづえ「石」。
『ヤナイグループ』は
STONEイズムを掲げて、60余年。
地球の環境保全に努めながら
社会の発展に貢献しています。



彫刻家・浅野徳三 作「虹を超えて」
ヤナイグループ 黒髪石材株式会社 徳山みかげ

新北九州空港の正面玄関横にあるモニュメントです。このモニュメントは、空高く弧を描く虹の上を希望を乗せた旅客機が超えて行く様を、そしてこの虹は新空港と各都市を繋ぐ幸せの架け橋でもあり、旅客機は未来を創る子どもたちの夢を表しています。

「清張さん」に出会う街。

文字＝牧野伊三夫

松本清張 (1909-1992)

まつもと・せいちょう / 作家。本名は「きよはる」。1909 (明治42)年、松本峯太郎・タニの長男として出生。幼少時に一時下関市で過ごす。8歳で小倉市 (現・北九州市小倉北区)へ転居。板櫃尋常高等小学校を卒業後、15歳で川北電気企業社小倉出張所給仕となり、19歳で版下工に転身。'39 (昭和14)年、朝日新聞九州支社広告部嘱託 (のちに社員)となり、版下製作を手がける。'43 (昭和18)年に教育召集により入隊、翌年再入隊。'45 (昭和20)年に復員後、再び朝日新聞社に勤務しつつ執筆を開始。'50 (昭和25)年、『週刊朝日』の「百万人の小説」に応募した『西郷札』が3等入選。3年後、『或る「小倉日記」伝』で第28回芥川龍之介賞を受賞する。'53 (昭和28)年、東京本社へ転勤ののち文筆専業となる。作品領域は幅広く、数々のベストセラーに輝いた社会派推理小説をはじめ、ノンフィクション、評伝、古代史、現代史など、40年余りの作家生活で著した作品は1000篇にも及ぶ。吉川英治文学賞、菊池寛賞、朝日賞など受賞多数。'92 (平成4)年、肝臓癌のため逝去、享年82歳。戒名は「清閑院釋文張」。

主要作品
現代小説、推理小説 / 「張込み」「点と線」「ゼロの焦点」「黒地の絵」「波の塔」「小説帝銀事件」「砂の器」「球形の荒野」「時間の習俗」「けものみち」「Dの複合」「火の路」「逃走地図」「神々の乱心」 (絶筆・未完)
時代小説、評伝的小説 / 「断碑」「かげろう絵図」「天保凶録」「私説・日本合戦譚」「両像・森鷗外」
ノンフィクション / 「日本の黒い霧」「現代官僚論」「昭和史発掘」「古代史疑」「清張通史」

*本特集に登場する場所

松本清張記念館

1998 (平成10)年に開館。作品群の詳細な解説、生原稿など資料のほか、東京・杉並の自宅内にあった存命中の書斎、本棚、書庫、玄関を忠実に再現。机上の斜面台、眼鏡や筆記具など、実際の愛用の品々が展示されている。これまでに計21回の企画展を実施。また清張についてより深く研究するための研究誌「松本清張研究」の発行、映像資料等の制作を行っており、これら業績により2008 (平成20)年、第56回菊池寛賞を受賞した。生誕100年となる本年は、全国巡回展 (2010年1月17日まで)、講演会、トークショーなど市内外で多彩なイベントが開催されている。

小倉北区城内 2-3 ☎ 093-582-2761
9:30～18:00 (入館は17:30まで) 年末 (12/29～31) 休
観覧料 / 一般500円 (団体、年長者利用証提示は400円)・中高生300円 (団体240円)・小学生200円 (団体160円)
<http://www.kid.ne.jp/seicho/> <http://seicho-100.com/> (松本清張生誕百年)

北九州市立中央図書館

旧・小倉市立図書館を継承し1975 (昭和50)年に開館。勝山公園内の現在の建物は磯崎新 (いそざき・あらた) による設計で、第17回建築業協会優良建築賞を受賞している。2階に郷土資料室を備え、本年7、8月には松本清張氏寄贈書籍を1階ホールに展示。隣接する北九州市立文学館には、松本清張氏をはじめ市にゆかりのある文学者の作品、直筆原稿などの資料が展示されており、北九州市で発行されている文芸同人誌も多数閲覧できる。

小倉北区城内 4-1 ☎ 093-571-1481
9:30～19:00 (土日休日は18:00まで)
月 (祝日の場合は翌日)、年末年始 (12/29～1/3)、ほか館内整理日休

*参考文献

「松本清張展——清張文学との新たな邂逅」北九州市立松本清張記念館 (2009)
「松本清張研究」創刊号編号～第十号 / 北九州市立松本清張記念館 (1999～2009)

「小倉」小倉市役所 (1950)
「新北九州風土記」朝日新聞西部本社編 (1974)
「ひろば北九州」2009年4月号 / 北九州市芸術文化振興財団
「ふるさとの思い出写真集 明治 大正 昭和 小倉」今村元吉編著 / 国書刊行会 (1979)
ほか、松本清張氏各著作を参考にしました。

「北九州思い出写真集」北九州市住まい・生活実行政委員会・財団法人北九州市協会の (1993) *掲載した情報は2009年5月取材時点のものです。

スローライフ・スローフード毎日の生活を心から楽しめる

住宅型有料老人ホーム「ニュー ハートピア」 リニューアルOPEN 入居者募集

ご見学
ご説明会
随時好評
開催中!

STARFLYER

CREDIT CARD × MILEAGE

STARFLYER CARD

Debut!

デザインで選ぶステイタス。



入会金 永年無料

年会費 永年無料

マイレージ機能付クレジットカード



60歳以上の皆様の自由で豊かな快適住宅

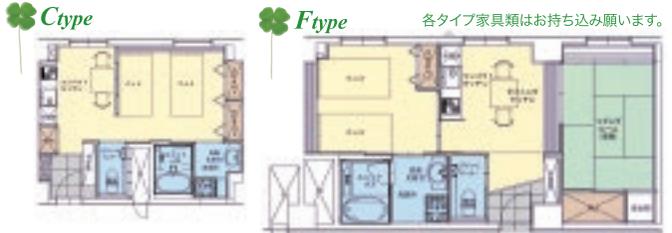
私たちがニュー ハートピアを 選んだ4つの理由

理由1 生活シーンに合わせたお部屋がいっぱい

- 戸建タイプから、2人部屋、1人部屋まで全10タイプの豊富な部屋数
- 2人部屋はお1人でも入居できます
- 各お部屋にインターネット回線完備

理由2 毎日の食事が楽しみです

- 全て国産食材を使用
- 冷凍食品・化学調味料も一切使用しない手作りの料理
- 管理栄養士の皆さんによる栄養管理の行き届いた食事で安心



理由3 充実した設備で毎日の暮らしも快適

- 広々としたロビー
- 発表会・宴会・カラオケ大会も出来る囲炉裏のあるサロン
- 広々とした開放感あふれるレストラン

理由4 立地が違います

- 施設の前には九州厚生年金病院
- JR黒崎駅も近く交通の便利も最高
- 黒崎井筒屋・黒崎商店街もすぐそば、ショッピングも最速



ご利用料金について 10パターンのお部屋をご用意しています。入居一時金必要(返還制度有)

1人部屋 1ヶ月 **135,000円~** 2人部屋 1ヶ月 **173,500円~**

※まずはお気軽にお問い合わせ下さい。詳しくご案内させていただきます。

住宅型有料老人ホーム
ニュー ハートピア お申し込み・お問い合わせ
Tel.093-645-0012
Fax.093-645-0017 E-mail youkoso@new-heartpia.com
〒806-0033 北九州市八幡西区岡田町10-10
◎貸会議室(宴会)受付中!◎韓国語教室・中国語教室 好評受付中!

社会福祉法人 福祉松快園(総合福祉施設運営) <http://www.shokaien.com>

詳しくは www.starflyer.jp
マイページ機能などWEBが使いやすくなりました

Good Design 「新日本様式」

北九州芸術劇場

●チケットお取扱い

KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER 北九州芸術劇場プレイガイド・響ホール事務局・財北九州芸術文化振興財団・電子チケットぴあ・ローソンチケットほか
(土、日、祝は除く)

劇団、本谷有希子 第14回公演
ライオンライオンライオン
「来来来来」

好評発売中



8月 25日
19:00

- 中劇場
- 作・演出 本谷有希子
- 出演 りょう、佐津川愛美、松永玲子、羽鳥名美子、吉本菜穂子、木野花
- ¥4500

BLACKBIRD
ブラックバード

好評発売中



8月 29日 30日
13:00 17:30

- 中劇場
- 出演 内野聖陽/伊藤歩
- 作 デビッド・ハロワー
- 翻訳 小田島恒志
- 演出 栗山民也
- ¥6000

追加公演決定!
8月29日17時30分?

万作・萬斎狂言

好評発売中



9月 9日 10日
14:00 19:00

- 中劇場
- 演出「棒撞(ぼうしぼり)」野村萬斎 ほか
- 「小傘(こがさか)」野村万作 ほか
- 一般席¥6000
- 学生席(小〜大学生)¥2000
- *学生席は、2階席最後列になります。

ツドエmeets北九州vol.1
tobugeki-union さかな公園004号室
「宵の唇」

好評発売中



9月 25日 26日 27日
12:00 14:00 16:00 19:00

- 小劇場
- 作・演出 鶏飼秋子
- 出演 藤尾加代子、大畑佳子、白石萌、浅野かさね、内山ナオミ
- ¥2000 *日時指定・全席自由

北九州芸術劇場
リーディングセッション vol.14 「甘い丘」

好評発売中



9月 12日 13日
14:00 18:00

- 小劇場
- 作・演出 桑原裕子(KAKUTA)
- 歌・演奏 花れん
- 出演 オーディション選出メンバー 成清正紀(KAKUTA)、原扶貴子(KAKUTA)
- ¥1500 *日時指定・全席自由 *当前共通

大人計画
あした
「サッチャんの明日」

7/26日発売



10月 23日 24日 25日
13:00 18:00 19:00

- 中劇場
- 作・演出 松尾スズキ
- 出演 鈴木蘭々、高藤官九郎、猫背椿、吉川彌生、星野源、家納ジュンコ、小松和重、松尾スズキ
- ¥5200 *当日¥300増

山海塾
うねつ
「卵を立てることから一卵熟」

8/16日発売



11月 1日
14:00

- 中劇場
- 演出・振付・デザイン 天児牛大
- 音楽 YAS-KAZ、吉川洋一郎
- 舞踏手 天児牛大、蟬丸、竹内品、市原昭仁、長谷川一郎
- ¥4500

翻案劇「サロメ」

8/30日発売



11月 3日祝
14:00

- 中劇場
- 出演 篠井英介、森山開次、江波杏子、上條恒彦
- 原作 オスカー・ワイルド
- 上演台本・演出 鈴木勝秀
- 詞筆 橋本治 ●音楽 池上眞吾
- ¥5000

平成21年度 公共ホール
演劇ネットワーク事業
人形劇俳優「たいらじょう」の世界

9/13日発売



11月 14日
14:00

- 中劇場
- 原作 サン＝テグジュペリ
- 演出・美術・人形操演 平常(たいらじょう)
- 一般(高校生以上)¥3500
- *15歳未満の方はご入場いただけません。



11月 15日
14:00

- 中劇場
- 原作 宮沢賢治
- 演出・美術・出演 平常(たいらじょう)
- 大人¥2000、学生(高校生以上)¥1500
- 子ども(中学生以下)¥1000
- 親子(大人と子ども)¥2500

北九州芸術劇場
リーディングセッション vol.15
「番町血屋敷」

10/4日発売



11月 21日 22日
14:00 18:00

- 小劇場
- 作 岡本綺堂
- 演出 加納幸和
- 音楽 村屋邦寿
- 出演 オーディション選出メンバー
- ¥1500 *日時指定・全席自由 *当前共通

【提携公演】
青年団 第60回公演
「カガクするココロ」「北限の猿」

9/20日発売



11月 28日 29日
13:00 16:00

- 小劇場
- 作・演出 平田オリザ
- 一般¥3000、学生・シニア(65歳以上)¥2000
- 高校生以下¥1500
- *お得な2回目セット券(前売のみ)あり。詳しくはお問い合わせください。
- *全席自由 *当前共通 *開場は開演の20分前
- *学生・シニア・高校生以下、は劇団・劇場のみの取扱

小松政夫と
イッセー尾形の
びーめん生活 in 小倉

9/27日発売



11月 28日 29日
14:00 15:00

- 中劇場
- 演出 森田雄三
- 出演 小松政夫、イッセー尾形
- ¥5000 *当前共通 *開場は開演の1時間前

Tel.093-562-2655

〒803-0812
北九州小倉北区室町1丁目1-11
リバーウォーク北九州内

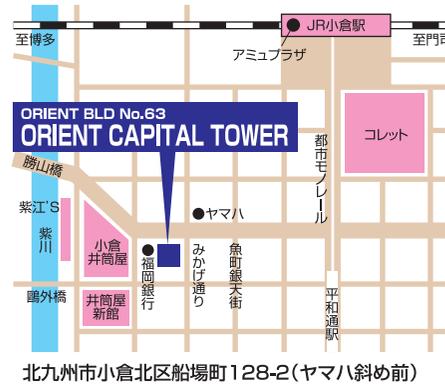
- メールマガジン配信中! 詳しくはコチラまで ▶<http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp>
- 北九州芸術劇場チケットクラブ会員募集中 ▶お問い合わせは Tel.(093)562-8435 (10:00~18:00)
- 特に表記のないものは、全席指定・未就学児入場不可・当日¥500増です。■公演日程・内容・時間・料金など変更になる場合がございます。
- 万一チケットが売り切れの場合はご了承ください。チケットのお求めはお早め!!! ●公演時に劇場ロビーでリバーウォーク北九州駐車場の割引駐車券を販売します。
- 10名様以上のグループ観劇受付中(宣伝営業課 TEL093-562-2520) ●託児あり/有料(要予約 TEL093-882-5063)

北九州市の玄関口、JR小倉駅から徒歩3分、 北九州空港から車で約30分の好立地。

小倉のランドマークタワー

ORIENT BLD No.63
ORIENT CAPITAL TOWER
オリエント キャピタル タワー HRC20階建

テナント募集中!!



テナント同時募集中

ORIENT BLD No.71
ORIENT TRUST TOWER
オリエントトラストタワー
HRC33階建/免震構造
1Fテナント
2K・1DK・全320戸
小倉北区馬借(北九州市立医療センター横)

北九州最高層
33階



ORIENT BLD. GROUP
オリエントビルグループ
<http://www.orient-gr.co.jp> info@orient-gr.co.jp

テナント募集のお問い合わせは
榎本ビル商事株式会社
TEL.093-531-4488
〒802-0081 北九州市小倉北区紺屋町1-12-201
福岡県宅建物取引業協会 福岡県知事第(11)2626号

新しいお墓のカタチ
納骨堂



増設につき、説明見学会開催中!!
御来場頂いた方に、記念品を贈呈致します。
※混雑が予想され、お待たせする場合がございますので、あらかじめご予約いただきますと幸いです。

永代使用料 **30万円**から
【一基】募集数:約400基
(管理料)B1・2F・3F:12,000円/年、1F・5F:18,000円/年

好立地
・小倉の一等地「小倉城内」
・窓の外には、四季折々の景色が広がります。
春は、桜。夏は、祇園祭。
秋は、月。冬は、雪降る小倉城。

安全
・エレベーター完備。
・車イスのままお参りできます。

安心
・後継者がいない方も安心。生前より葬儀ご予約承ります。
・宗教、宗派問いません。

こんな方々にお勧めしております

- ◆交通の便が良いところをご希望の方
- ◆清掃・管理が大変な方
- ◆お墓が遠方で縁遠くなられている方
- ◆現在お持ちのお墓に入りたくない方
- ◆天候に左右されずお参りしたい方

宗教・宗派・国籍を問いません

当納骨堂は、宗教・宗派・国籍を問いません。神事・仏事などの場合は各宗派に合わせた対応が可能です。どうぞお気軽にお問合せください。

八坂神社附属祖霊殿 祇園精舎

0120-676-738
Free

〒803-0813北九州市小倉北区内2番2号 TEL.093-571-0888 FAX.093-571-2200
受付時間/9:00~17:00(年中無休) ●西小倉駅前バス停より徒歩3分。お車でもお越しいただけます。



北九州発信
MLTE育成講座

メディケアリンパ テクニカルエキスパート

初めての方から
プロライセンス取得まで
生徒募集

健康と美と癒しを提供し、未病の世界へ
リンパの流れが滞ると体のトラブルが起きやすくなります。当協会は、リンパの流れを整え、健康と美と癒しを提供し、未病の世界をつくることを目標としています。もちろん、今注目を集めている、がん治療後のリンパ浮腫に対するリンパドレナージュにも対応しています。

施術ご希望の方は
リンパサロンテダリへ ☎093-513-3223



お問い合わせ
メディケアリンパ協会
北九州市小倉北区浅野1-1-1 小倉駅南口JR九州旅行株式会社地下1階
TEL 050-3387-8806 FAX 093-513-6705

英語教育のプロフェッショナル
EMSインターナショナル

英語は大学へのパスポート!!

英語特待入試枠(AO入試)を利用して大学を目指せ!!
※AO入試は各校でも受験できます。 ※第一志望のすべり止めにも利用できます。
※慶応・一橋・横浜国立など、多数の合格者を出しています。

プログレス対応 英語レッスン講座 (個人レッスン・個別レッスン[2名より]) 幼稚園・小・中・高 対象	TOEIC講座 ロースクール医師試験に必修 生徒募集中
英検(準1級)・TOEIC(720点以上)・TOEFL(CBT80点以上)の資格があれば、一流大学(慶応大学・横浜国立大学及び理国国立大学等)に入学が可能です!今年も広島大(医)・防衛大(医)・産業大(医)・宮崎大(医)・順天堂大(医)・福大(医)・久留米大(医)・日本大学(医)他・歯・薬学部、法学部、経済学部にも合格しています!!	■週2コース 火・金(19:00~20:30) 15,000円
センターテストで満点をねらいませんか!! センター試験対策講座(英・国)	■週1コース 木(19:00~20:30) 10,000円

センターテストは点を取る完璧なノウハウがあります。それを知ってしまえば、点を上げるのは簡単です。EMS Int. では20数年の指導実績の中で、毎年高得点者を輩出しています。プロの授業で満点を狙いましょう。

インターナショナル幼稚園
見学会随時好評開催中!!(要予約)

園児募集中!! 小学校入試サポート
対象:1歳8ヶ月~少人数教育

モンテッソーリ教授法が教育の根拠です。その他、最新の教育心理学を応用しています。

インターナショナル幼稚園
卒園後の英語力維持講座 **ロンパールーム**

■日 程/月~金 15:00~15:50 ■受講料/1ヶ月 20,000円	■日 程/火曜日(※5回目もあり) ■月 謝/5,000円
--	----------------------------------

小倉北区清水1丁目6-11
☎093-571-5430
<http://emsint.jp>



フルオート最高機種
を利用してこの価格!

エコキュート
ダイキンEQ37KFV
リモコン付
メーカー希望小売価格
¥782,250

IHクッキングヒーター
日立HT-B7S
メーカー希望小売価格
¥225,750

標準取付工事費

なんと!! 69.9万円 (税込)

ど好評をいただき、業務用エアコン6000台以上の実績 **なんと!!**

全メーカー店舗・事務所用
エアコン全機種を

リビングの天井埋め込みエアコンも
あなたが考えている以上にお安く
取り付けられます。

80%引き

☆最後にお電話ください☆

九州電気設備工事(株) 本社/北九州市八幡西区上の原2-2-54
☎0120-03-1456

オール電化“最低42万円”から
※割引はすべてメーカー希望小売価格より(1月末日まで)

阪九フェリーキャンペーン

金・土・日 「週末や祝日は阪九フェリーで、出掛けよう!!」

週末・祝日 割引開始!!

2009年7月17日(金)乗船~2009年11月1日(日)乗船までの金・土・日・祝日
(8/14~16を除く)

今度の週末 楽しみだね!!
今度の休みは、阪九フェリーだね!!

好評予約受付中!!

新門司 ↔ 神戸・泉大津

■2等・運賃(片道) 6,000円 → 4,500円!!	■5M未満乗用車(片道) 21,200円 → 15,000円!!
--	--

大人2名・小人2名・車5M未満で
[2等指定B]ご利用の場合
片道通常価格 40,700円が
29,700円!!

※「週末・祝日限定プラン」とその他の割引の併用は出来ません。
※詳しくは下記までお問合せ下さい。

ご予約・お問い合わせは **阪九フェリー**
詳しくはお気軽にお問い合わせください

【専用電話番号】〒800-0113 北九州市門司区新門司北1丁目1番
TEL 093-481-6581
■予約時間/09:00~20:10(日曜日は09:00~18:20)

www.han9f.co.jp/
<http://www.han9f.co.jp/i>





小倉南区の海を見晴らす丘に、総数553区画のビッグスケールの街。

ビューシティ楡の木坂



ビューシティ楡の木坂の街並(平成21年6月撮影)

建築条件付宅地好評分譲中

■敷地面積 / 200.42㎡ (60.63坪) ~ 391.90㎡ (118.55坪)

これの木坂 <http://www.viewcity.jp>

お問い合わせ **0120-020-963**

※年末年始・夏期休暇は休ませていただきます。 ※各ハウスメーカーの定休日の都合により、ご希望のモデルハウスがご覧いただけない場合があります。予めご了承ください。

《事業主》 国土交通大臣(1)第7851号
JFE エンジニアリング 株式会社
〒800-0210 福岡県北九州市小倉南区吉田にれの木板2丁目1-38
TEL.093-471-2121 FAX.093-471-2181



■「ビューシティ楡の木坂」団地概要 ●所在地 / 北九州市小倉南区吉田にれの木板1丁目・2丁目、沼本町4丁目 ●交通 / (住宅地より)「JR下曾根駅」まで約3.18km・「吉田小学校」バス停まで約390m(徒歩5分) ●地目 / 宅地 ●用途地域等 / 市街化調整区域 ●建物高さ等制限 / 10m(軒の高さは7m以下とする) ●建ぺい率 / 40% ●容積率 / 60% ●道路幅 / 幅員6m~16m ●私道負担金 / なし ●負担金 / J・COM施設負担金 / 60,000円(1区画)・団地維持管理費 / 20,000円(1区画)、その他飲用水施設設備納付金 / 51,700円(口径13mm) ※全て消費税込 ●主たる施設 / 飲用水 / 公営水道、電気 / 九州電力、ガス / 都市ガス、汚水雑排水 / 公共下水道に直接放流、雨水 / 道路側溝 ●開発許可 / 北九州市指令建都指宅(調)第11-19号 ●開発総面積 / 248,664㎡ ●総区画数 / 553区画 ●事業主 / JFEエンジニアリング株式会社 ●総合コンサルティング / 有限会社ランドプランナーズ ■「ビューシティ楡の木坂」分譲宅地概要【建築条件付宅地】 ●販売区画数 / 100区画 ●販売価格 / 609万円(1区画)~1,829万円(1区画) ●最多販売価格帯 / 1,200万円台(23区画) ●敷地面積 / 202.92㎡(61.38坪)(1区画)~391.90㎡(118.55坪)(1区画) ●売主 / JFEエンジニアリング株式会社 ●販売代理 / 株式会社一条工務店、三洋ホーム株式会社、ジェイアール九州住宅株式会社、スウェーデンハウス株式会社、住友林業株式会社、セキスイハイム九州株式会社、積水ハウス株式会社、大和ハウス工業株式会社、辰巳住宅株式会社、株式会社谷川建設、東宝ホーム株式会社、トヨタホームつくし株式会社、株式会社なかやしき、株式会社バナホーム北九州、ミサホーム九州株式会社、株式会社みぞえ住宅 ※上記建築条件付宅地は協賛ハウスメーカー16社の内、いずれか1社のハウスメーカーの指定が有る区画と指定が無い区画があります。 ●広告有効期限 / 平成22年4月末日 ●概要は平成21年6月30日現在のものです。 ※先着順販売の為、売却済みの場合はご容赦ください。【建築条件付宅地について】建築条件付宅地分譲とは、土地売買契約締結後3ヶ月以内に住宅の建築請負契約を締結していただくことを条件として販売いたします。この期間内に住宅を建築しないことが確定したとき、または住宅の建築請負契約が成立しなかった場合には、土地売買契約は白紙となり受領した金銭は全額お返しいたします。